

[道 徳]

差別や偏見を許さない感性や行動力の育成をめざし、
単元構成を工夫して行う人権教育，同和教育の実践

大橋 美紀*

1 主題設定の意図

(1) 主題にかかわる，問題点や課題

学校現場における人権教育，同和教育が目指すものは，学校の教育活動全体を通じて人権問題に対する正しい理解の促進に努めるとともに，子どもたちに差別や偏見を許さない感性や態度を育むことである。文部科学省の「人権教育の指導方法等の在り方について」でも，「人権教育は，人権に関する知的理解と人権感覚の涵養を基盤として，意識，態度，実践的な行動力など様々な資質や能力を育成し，発展させることを目指す総合的な教育である。」と表現されている。また，新潟県人権教育・啓発推進基本方針においても，同和教育を中核にした人権教育を推進し，人権教育，同和教育の目標として，「部落差別などのいわれなき差別の歴史的社会的背景について正しい知識理解をさせる。」「障害者，女性，外国人など13の人権課題^{注1)}を掲げ，その人等に対する差別に気付かせ，すべての人々の人権を尊重することの大切さを理解させる。」「日常見過ごしがちな偏見や差別に鋭く気付かせ，受けた者の身になって，進んで差別問題の解決に立ち向かわせる。」そして，「自分自身が人権を侵害する存在であり，侵害される存在であるという意識をもたせ，人権問題を自己の問題として考え，差別を受けている人に寄り添い，支え合い，解決に向かって共に歩む『かかわる』姿勢を育てる。」と掲げられている。つまり，差別や偏見に対する行動力の育成が求められているのである。

当校では，6年生という小学校生活を締めくくる時期，柔軟に物事を考えられる時期に，同和問題を扱った授業を行っている。そのために，例年6年生は，「いのち・愛・人権」展にも見学に行き，人権感覚を磨き高めている。しかし，子どもたちが学習を終え，世の中に差別があることや，差別がなぜ起きるかを理解し，「差別はしない。」という気持ちをもつことができるが，自分が差別される者，差別する者になるという当事者意識は弱く，差別や偏見を許さない感性やそれを態度に表す実践力をもつところまで成長できているとは言えない。

これらを踏まえ，子どもたちに差別や偏見を許さない感性や態度を育むためには，どのような取組をしていったらいいのかを考えながら人権教育，同和教育を実践していくべきであると考えた。

注1) 女性，子ども，高齢者，障害者，同和問題，外国人，感染症被害者等，新潟水俣病被害者，北朝鮮による拉致被害者，犯罪被害者やその家族，刑を終えて出所した人等，インターネットによる人権被害，様々な人権問題 以上の13項目

(2) 子どもの実態と目指す子ども像

本学級は，男女大変仲がよく，お互いに声を掛け合い，高め合える学級である。友だちに対して，お互いに認め合い，みんなの個性を大切にしようと考えられる子どもが多い。しかし，他人を見て，自分の方が優位に立っていると感じ，安心しているような態度があることも事実である。実際，6年生の中には，「障がい者」という言葉を安易に使ったり，ある一定の子どもに対して差別的な態度をとったりしている子どももいる。全員の子どもが，この世の中に差別があるとは感じている。しかし，自分が差別者になる可能性があると思う子どもはほとんどいなく，差別を差別として感じていない子どももいるように感じた。また，同和問題や被差別部落という言葉自体を知らない子どもも多くいた。

そこで，同和教育を中核においた人権教育を重ねていくことで，差別について正しい知識を身に付け，世の中にあるさまざまな差別に気付く力を付けていく。また，「差別をされた人はかわいそう。」「なぜ，差別が起きるのだろう。」「差別をしない。」では止まらせず，「差別をなくす。」「差別を許さない。」という積極的に差別をなくそうとする子ども，差別に負けない子どもの育成を目指していく。

2 研究目的

①社会科，道徳，総合的な学習の時間を合科的に取り扱い，単元構成を工夫して継続した人権教育，同和教育を行うことにより，正しい知識理解を深め人権感覚を豊かにすることができること，②身近な資料を使い，問題を自分のこととして考えさせることにより，差別や偏見を許さない感性や態度（行動力）の育成に繋げることができることを A児からE児の5人の抽出した子どもの変化を追いつながりながら検証する。

* 柏崎市立比角小学校

3 実践の構想

- (1) 人権教育，同和教育を社会科，道徳，総合的な学習の時間と関連させた単元構成を行い，正しい知識を身に付けさせ，意義・内容や重要性について補充，深化を図る。
- (2) 子どもたちの身近にあり，自分が差別者になっていたことに気付くことができる資料や映像を使用したり，話し合いを取り入れたりする中で，自らの差別行動や差別意識に気付かせていく。

4 研究の概要

- (1) 単元名 差別を見抜く力，差別に立ち向かう心 内容項目 4-(3)公正公平
- (2) ねらい 人権を大切にしようとする生活習慣や態度を育てる中で，今現在も世の中には差別があることを知り，その差別を見抜き，差別をしない，させない，許さない態度を育てる。
- (3) 学習期間 12月1週～12月3週
- (4) 対象児童 6年生 78名
- (5) 単元の指導計画 全12時間

		事前活動	
つかむ	【総合的な学習の時間】	4時間 「いのち・愛・人権」展の見学 「深めよう絆スクール集会」への参加	
	【社会】	2時間 「人権の歴史」 世の中には，様々な差別が未だに存在することを知る。 部落差別の起源を学び，差別の不当性を感じる。	
↓			
		道徳	
深める	【道徳1】	1時間 資料「手紙～夕焼けが美しい～」 ねらい 被差別部落に人が受けた差別の酷さを知り，言葉や文字を知ることの価値と差別を考えさせ，差別を許さないという心情を育てる。	差別を許さない気持ち
	【道徳2】	1時間 資料「夏休みが待ち遠しい『教科書無償』」 ねらい 部落差別を受けても立ち向かった人たちの強さに気付かせ，差別に対して憤りをもつだけでなく，差別のある社会に対して闘っていかうという心情を育てる。	差別に立ち向かう強さ
	【道徳3】	2時間 資料「宙に消えた『ありがとう』」 ねらい 自分の障がいをもっている人に対する偏見が差別につながることを知り，認め合い尊重し合う心情を育てる。	自分の差別意識への気付き
広げる	【道徳4】	1時間 自作資料「この言葉，この行為は差別にあたるでしょうか」 ねらい 差別を見抜く活動を通し，自分の差別意識を見つめると共に，差別問題を主体的に捉え，差別をなくしていこうという心情を育てる。	差別を解消しようとする態度
	↓		
		事後活動	
		【総合的な学習の時間】	1時間 「輝く生き方をしよう」 人として尊重させるとはどういうことかを振り返り，差別のない平和な世の中を作ろうという心情をもち，卒業式で生き方を宣言する。

(6) 授業の実際

①「つかむ」ための事前活動 『いのち・愛・人権展』の見学

「いのち・愛・人権」展に見学に行く前に，社会科では，「中世において差別が社会的に成立したこと」や「被差別部落の人が伝統文化への貢献をしたこと」「解体新書の腑分けなど高い技術をもっている人が被差別部落出身者であったこと」「水平社宣言をし，差別に負けず解放へと運動したこと」など，人権の歴史を学習した。また，総合的な学習の時間では，「障がい者」「性別」「外国籍住民」「HIV感染者やハンセン病もとの患者，新潟水俣病の患者などの病気の人」「被差別部落出身者」等に対する，世の中にある差別について調べたりした。そして，子どもたちは，未だに世の中にはたくさんの差別があることや，差別が生まれてきた背景をうっすらではあるが感じ取ることができた。

人権展の会場には被差別部落の方に対する差別，いじめを苦にして自殺をされた人の遺書や写真など，世の中にある人権差別がたくさん掲示してあり，子どもたちは，メモをとりながら，一つ一つ丁寧に見ていた。



〈写真1〉 人権展にて，真剣にメモをとる子どもの様子

【子どもたちの学習シートの記述から】

A児：いろいろな差別の事実を見て、何だか心臓が苦しくなった。

B児：銀閣寺の庭を、被差別部落の人が造ったことを知りました。社会で室町時代をやった時、先生が言っていたけど、今日、写真を見てよく分かりました。差別を受けた人も、そうでない人もたくさんの才能があると思いました。

C児：無罪なのに差別によって有罪にされた人が、それに負けずにがんばり続けたことを知り、すごい強さだと思いました。

D児：自らの命を絶つほど追い込むなんて、いじめは怖いと思ったし、絶対にしてはいけないと改めて思いました。いじめはやっぱり人権無視です。いじめで自殺した人のことを知り、いじめはどうしたらなくなるのだろうと、真剣に悩みました。

E児：嫌なことだらけで、差別はとてども嫌だと思った。

どの子どもの感想からも、差別はよくないことだという気持ちが伝わってきた。抽出した子どもの中で、B児やC児のように、被差別部落の人は優れた才能をもってことや差別と闘ってきた強さをもってしたことなどを理解している様子が伺えた。D児のように、何かしなくてはと考え始めた子どももいた。しかし、A児やE児のように、まだ、「差別は嫌だ。」「差別されたらつらい。」で止まっている子どもも見られた。

②「深める」ための道徳授業

ア 道徳1 資料「手紙～夕焼けが美しい～」

差別を許さない気持ち

被差別部落出身のおばあさんが書いた手紙を資料にする。被差別部落の人々が、差別により、文字の読み書きを学ぶ機会を奪われ、苦労の中で生活を営んできた現実を学ぶ。

子どもたちは始め、上手ではない字を見て、「下手な字だ。」「幼稚園の子の字だ。」と言った。そして、差別により勉強できなかった人が、後に一生懸命勉強して書いた文字であることを伝えると、シーンと静まり真剣になった。子どもたちには、「かわいそうなおばあさんだなあ。」ではなく、何がこのような文字を知らないおばあさんを生んだのかを考えさせたかった。そこで、なぜ文字を知らないのか、文字を得ることで生き方がどう変わったかを、少人数グループで話し合わせた。それにより、子どもたちは部落差別に対する憤りを強めていった。

イ 道徳2 資料「夏休みが待ち遠しい『教科書無償』」 差別に立ち向かう強さ

この資料には、教科書が無償になる背景が書かれている。今、当たり前のように無償で配布されている教科書が、実は部落差別と関係していたことを知り、子どもたちは驚いた。

これまで、「かわいそうだ。」「気の毒だ。」と、被差別部落の人に同情するだけだった子どもたち。しかし、その人たちが差別に負けず、社会に訴えたことで、現在のように教科書が無償になったことを知り、立ち向かった人たちの強さに気付くことができた。また、子どもたちにとって身近な内容を扱うことで、自分たちとはかけ離れたことと感じていた部落差別を、より身近で現実的なこととして考えさせることができた。

ウ 道徳3 資料「宙に消えたありがとう」

自分の差別意識への気付き

脳性マヒの人の介助者の取る行動と自分の普段の行動を比べ、「これまでの自分の心の中に障がい者に対するバリア（障壁）はなかったか。」を、考えていった。

自分のした差別に気付くことが差別を無くすためには大切なことであることを伝え、ワークシートに、これまでの自分の行動や正直な気持ちを書き始めた。「この人（登場人物）はどう接していったらいいか。」を考えるよりも、子ども達が自分の生活を振り返り、自分のこととして考えた。

【子どもたちの学習シートの記述から】

A児：自分は差別なんてしたことないと思っていたけれど、心の中にバリアがあった。やさしくさえすればいいと思っていた。これはできないだろうと決めつけていた。自分も偏見の目があった。

B児：何だか汚い気がして、大きく避けたりしたことがある。それが悪いことだと感じていなかった。

C児：ぞうきんをかけるのが遅かったりすると、「早くやって。」と思ったことがある。その子なりにがんばっているのだから、温かい目で見守り、困っていたら助けてあげたい。

D児：特別支援学級に行っている人を「障がい者」と思っていた。だから、友達に対する態度とは違う態度だったと思う。人はみんな人だから、勝手に判断するのはやめたい。

E児：騒いでいてもかかると面倒くさいからほっといたことがある。この人にはこう、あの人にはこうではなくて、全ての人に平等に接したい。

子どもたちが他人事ではなく自分のこととして考えていた。自分が差別をしていたことに初めて気付き、衝撃を受けていた子どももいた。しかし、子どもたちの学習シートには自分のことをしっかりと振り返り、正直に書かれた意見が多数見られた。中には、C児のように「その子なりに…。」「助けてあげたい…。」などの言葉を書いている子どももいた。

③「広げる」ための道徳授業

道徳4 自作資料「この言葉、この行為は差別にあたるでしょうか。」 差別を解消しようとする態度

右表のような差別項目をあげた資料を基に、何が差別にあたるか、なぜ差別にあたるかを考えていく。差別項目は、子どもたちの身近にも存在し自分が差別者になっていたことに気付くことなどに配慮し吟味して作成した。まずは、子どもたちは10個の項目を個々に読み、これまでの学習を基に、差別だと思ふものは青の付箋、差別ではないと思ふものはピンクの付箋にそう思った理由を書いた。そして、持ち寄った付箋を基にして班ごとで話し合いをした。これまで学習してきたことを出し合い、協力しながら、どの言葉が差別にあた

(表1) 授業で取り上げた差別項目

～この言葉、この行為は差別にあたるでしょうか。それは、なぜでしょうか。～

差別項目	
①	のび太さんは命令されているのではないが、毎日たけしさんのランドセルを準備してあげている。
②	勉強しないと一流大学に入れない。フリーターをするつもりなら勉強しなくてもいいが。
③	思い切ってやってみようと学級委員長に立候補したが、「おまえは勉強できないし、話すのが苦手だから無理だ。」と言われた。
④	H I V (エイズ) に罹っている人が転校してきたので、みんなとは別の専用トイレを使ってもらった。
⑤	大人はお酒を飲んでもいいが、子どもは飲んではいけない。
⑥	太郎さんはA地区だから誕生会に誘うが、二郎さんはB地区だから誘わない。
⑦	外国人の犯罪が多いと聞いたので、外国人の隣をさせて座った。
⑧	男子の方が、声が大きいい貫禄があるから、運動会の応援団長はやっぱり男子がやった方がいい。
⑨	お年寄りが、若者がよく行くショップに行くと、「ここはあなたのような人が来るところではない。」と、追い返された。
⑩	車椅子に乗っている花子さんが、段差の前で止まっていたので、だまって車椅子を後ろから押してあげた。



〈写真2〉付箋を持ちよりグループで話し合っている様子

るかを見抜いていった。全員の考えが一致する項目と、意見が分かれる項目があった。意見が分かれて討論になったグループもあった。分かれた項目については、話し合うことにより、たくさんの知識の中で判断をしようとしていた。

具体的な話し合いは以下ようになった。

①について意見が分かれた班の話し合い	E児	これは差別じゃないでしょ。だって、のび太は命令されてないのに勝手にやっているんだよ。
	他の子ども 1	そうだよ。やりたくてやってあげているんだから、差別じゃないと思う。
	C児	でも、たけしの方がえらいってなっているんじゃないの。だから、のび太はたけしの子分みたいになっているんだよ。のび太はたけしに気に入ってもらわないと、いじめられるのかも。だから、これ差別だよ。
	教師	自分が毎日、誰かのランドセルを用意させられていたらどう？お互いにやり合うならいいけれど、一方がいつもしてもらっているってのは、その人たちの間に序列があるんじゃない？
	他の子ども 2	そういわれれば差別かもな。人に序列があるのは変だもんね。
②について意見が分かれた班の話し合い	他の子ども 3	これは差別でしょ。
	他の子ども 4	どこが？全然いいじゃんこんなの。だって、ぼくだって、勉強しないと一流大学に行けないって、お父さんにも言われるよ。何がダメか分からない。
	A児	フリーターをバカにしているところがダメなんじゃない？
	他の子ども 5	ああ、職業差別か。それ、あったね。
	教師	すごいね。よく見付けたね。じゃあ「勉強しないと一流大学に入れない。」ってところはどう？
	全体	……
	教師	一流とか二流とか、何で比べているんだろうね。

⑩について学級全体での話し合い	教師	⑩を差別だとして人はいる？
	全体	いない。いない。
	他の子ども 6	え？これ差別なの、先生？ 何で差別なの？
	教師	前の時間にやった「宙に浮いた『ありがとう』」のお話覚えてる？障がいをもっている人が、ありがとうと言おうと思ったのに、聞かずにさっさと行ってしまってさみしかったという話。
	他の子ども 7	うん。そっか、黙って勝手にやったからいけないんだ。
	D児	「お困りでしたら、手伝いましょうか？」って聞けばいいんじゃない？
	他の子ども 8	でも、止まっていたってことは困っていたってことじゃない？
	D児	そんなのわかんないよ。これから、一人でがんばってやってみようと思っていたかもよ。
	教師	気持ちが分からない。だから、尋ねてみればいいんだね。がんばってくださいって声をかけてもらうだけでも、うれしいと思うよ。
	D児	そうか。聞けば気持ちが分かるもんね。
	教師	あと、先生は、「押してあげる。」という言葉が気になるな。
	C児	上から目線だ。
教師	そうだね。してあげるとか手伝ってあげるではなく、いっしょにやるという気持ちが大切かもね。これは難しいね。でも、少しでも、こう感じるかもって考えるだけで、伝わり方は違うと思うよ。だからって、障がいをもっている人に出会ったとき、どうしようどうしようって悩んで何もしなくなっちゃダメだからね。	

話し合うことにより、たくさんの知識の中で判断できるし、人によって差別と捉えることが違うという事実にも気付くことができた。差別を差別として捉える感性を磨くと共に、自らの差別行動や差別意識に気付くことができた。

5 成果

(1) 単元構成を工夫し、同じ価値を求める授業を集中的に行うことで、思考を重ねていったり前時を振り返ったりすることができ、人権問題、同和問題の正しい知識を身に付けさせ、求める心情や態度へ導きやすくなった。

差別や偏見を許さない感性や態度の育成をめざし、人権教育、同和教育において、歴史の学習、人権展に向けての事前学習を含め12時間集中して行った。本単元では、人権問題、同和問題に対する正しい知識を身に付けさせることを目標の1つにし、学習を積み重ねた。さまざまな資料や映像を使い、「部落差別などのいわれなき差別の歴史的社会的背景」や「未だにいろいろな差別が存在していること」などを学んできた結果、6年生全体を見ても、アンケート結果のように「差別を見抜く力が付いた。」「差別に対して行動に移す。」と、自分の変化に気付くことができた子どもが多く見られた。抽出した5人の学習シートの記述の変化を見ても、子どもたちは、自分が差別をしていたこと、自分が差別者になる可能性があることに気付いたことが伺えた。そして、これから差別をなくすためにどう行動したらよいかを具体的に考えていた。

やはり、人間は学ばなければ変わらない。子どもたちの人権感覚を磨き、豊かな感性を身に付けることは、人権問題、同和教育に対する正しい知識が必要不可欠である。人権教育、同和教育において、道徳の時間だけではなく、社会科や行事などさまざまな視点からも行えるように単元を組むこと、単発で行わずある程度期間を決め、集中的に学習を行うことは大変有効的であった。

【子どもたちの学習シートの記述から】

A児：自分よりもできていない人を見ると、どうしても心の中で下に見てしまう。ほくだけでなく、世の中の人々が、自分以外の人を見下さないで平等に見ることができれば、差別がなくなっていくと思う。

B児：この学習をする前は、気付かないうちに差別をしていたかもしれない。後からとっても後悔した。でも、今は、ちゃ

(表2) 6年生78人における 人権の学習事後アンケート

質問事項	はい	どちらとも言えない	いいえ
人権・同和問題の学習で初めて知ったことがある。	78	0	0
6年生で人権・同和問題を学習してよかった。	75	3	0
差別かどうかを見抜く力が付いたと思う。	74	4	0
これから差別はしない自信がある。	57	18	3
自分が差別を受けたとき、しっかりと言うことができる。	58	20	0
身の回りで差別を受けている人がいたら、助けることができる。	56	22	0
差別をなくす世の中にするために行動する。	60	18	0

んと気を付けている。すべての人が、絶対にいじめや差別のことを学んだ方がいい。私たちは、差別のことを勉強をしたので、これからは、間違った知識をもっている人がいたら、正しい知識を教えていく。すぐには差別はなくならないかも知れないけど、小さなことからコツコツやっていきたい。

C児：今までの自分には「かわりたくない。」「さげたい。」などの意識があった。だから、差別をしていたんだなあと思った。これからは、「みんな平等。」「人それぞれ違うものをもっている。」ということ意識しながら行動したい。みんな、それぞれ違う個性をもっていて、「あの人にはあってぼくにはない。」ということや、「自分も差別にかかわることもあるかも知れない。」と考えて行動するべき。差別をなくそうという意識をもたないと差別はなくなる。

D児：低学年の頃は、自分と違う人を少し白い目で見たりしていたかも知れない。もっと早く人権の勉強をして、いじめられている人の気持ちに気付いてあげたかったと思う。学習したことをもとにして、いじめや差別を見たら注意できる強い人間になりたい。

E児：この勉強をして、自分の行動を見つめ、直すことができてよかった。自分の中にある誤った知識を捨てて、自分が差別をしているかも知れないという危機感をもって行動するべきだと思う。

(2) 子どもたちの身近に存在し、自分が差別者になっていたことに気付くことができるような資料を自作することで、自らの差別行動や差別意識に気付かせることができた。

「差別を見抜き差別をなくそうとする態度、差別に負けない態度」という実践力を育てることを目指すと、知識を学ぶだけでは十分ではない。「スキルのな学習を取り入れたい。」「これまで学習したことが生かせるような場面を設定することで、子どもたちがさまざまな場面で具体的な行動に表せるようになるのではないか。」と考えた。

本研究では、子どもたちが普段生活していく上で、より身近に存在している言葉や行為を取り上げ、その中から自分が差別者になっていたことに気付くことができるような項目を自作した。これまで学習したことが生かせる内容や身近な事例を設定することで、子どもは差別を、他人事ではなく自己のことと感ずることができた。そして、さまざまな場面で具体的な行動に表せるようになった。資料を自作したことは、子どもたちが真剣に考え、「自分は、差別する人間にも差別される人間にもなりうる。」と、気付くことにつながった。この気持ちが、差別や偏見を許さない感性や態度を育てていくことになると感じた。それと同時に、自作の資料は、それにより不快に感ずる子どもはいないか、社会に対してマイナスイメージをもたせないかなど、十分に配慮をする必要がある。人権教育、同和教育は、消極的な指導になってはいけないが慎重に扱うことも忘れてはならない。

また、付箋に書いた自分の意見を持ち寄り、話し合うという方法をとったことで、1つの事柄を多角的に見ることができるようになり、人によって差別と捉えることが違うという事実にも気付けた。それにより、人とかわりながら生活していく以上、自分に差別をしているつもりがなくても、人によっては差別と感ずる危険性があることを自覚していないといけなさと感ずることができた。

6 課題

本研究では、子どもたちが人権問題、同和教育を、より自分のこととして感ずるために、そして、「差別をなくす。」「差別を許さない。」という積極的に差別をなくそうとする態度をとることができるようにするために、人権教育、同和教育の指導方法を考えてきた。そして、身近に潜む言葉や行為の事例から差別を見抜き、その理由を見つめるという方法を作り上げた。「扱う資料を慎重に作ること」、「十分に知識理解を深め、人権感ずるを豊かにした上でこの授業を行うこと」等の課題を見つめ、今後も、場の作り方や内容を精選して、差別に立ち向かう勇気や行動に移せる実践力を育てていくスキルのな課題を開発していくことが課題である。

しかし、新たな資料や方法を考えていくだけでは不十分である。教師は、現在の人権教育、同和教育の新潟県の課題が「部落史についての正しい理解」と「かわる同和教育」であることをしっかりと捉え、少しでも心に響く人権教育、同和教育を実践するんだという強い心構えが必要である。そして、差別をなくすには、何よりも、教師が常に、差別はしない、させない、許さない、見逃さないという鋭い人権感ずるをもち、子どもに問題提起していく根気強い取組が必要であると感ずる。教育の原点に同和教育、人権教育があることをしっかりと認識して、子どもたちに接するよう努力を重ねていくことが大切である。

7 参考資料 文献

- ・「いのち 愛 人権」新潟県実行委員会 「いのち 愛 人権」展 資料 2010年
- ・今野敏彦 「人権感ずるをはぐくむ」 明石書店 1999年
- ・外川正明 「部落史に学ぶ2」 解放出版社 2006年
- ・新潟県教育委員会 「新潟県人権教育・啓発推進基本方針」 2010年
- ・文部科学省 「人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕」 2008年